

連載 新しい書写実践の試み ⑨

## 行書における漢字と平仮名の調和をめざして

(硬筆への発展) — 「竹取物語」 — (一年)

新しい指導を考える会

### 1 実践の趣旨

中学一年生の書写学習においては、楷書から行書への展開が図られる。漢字と平仮名を調和させた、速く書ける行書を日常生活にも活用できる力を育てたい。

一学期には、楷書の学習(毛筆・硬筆)に加え、平仮名の筆使いの定着を図るため、小筆による平仮名学習も実施し、楷書に調和する平仮名の筆使いに慣れる。そして、二学期は、楷書で学んだ筆使いを生かし、漢字の行書への展開を図る。

まず、いくつかの毛筆教材を通して、行書の筆使いの基本学習に取り組んだ。本実践(硬筆への発展)は、これらの学習を踏まえたうえで設定した。日常生活に生かすべく、行書での漢字と平仮名を調和させ、毛筆から硬筆へ応用、発展させようとする試みである。本来、行書における漢字と平仮名の調和を図る学習は、二・三年の指導事項であるが、発展的な学習として取り上げることと、次学年での学習が展開しやすくなることを考えた。

### 4 指導の実際

#### 【第一時】

導入において三時間の学習の見通しを示した。今回の学習は行書の発展学習として、最終的に「竹取物語」を硬筆で書くことを伝えた。

すでに国語の授業では「竹取物語」を終えているので、教材文を何度か声に出して読む活動を取り入れ、全文の意識化を図った。その際、文章中の漢字と平仮名の表記に着目して読むようにし、毛筆での学習につながるよう配慮した。

本時は行書での漢字と平仮名を調和させて書くことをねらいとするので、毛筆学習の課題文字には、「今は昔」「竹取の翁」「竹を取りつつ」「使いけり」の四種を提示した。生徒はそこから二種を選択して書くことにした。硬筆への発展を考え、始筆は軽く筆を入れることや、最終画の終筆は次の文字へのつながりを意識して書くことを、教師が書いて示した。



▲ 教師が示した例



▲ 生徒が書いた例

#### 【第二時】

前時の学習を生かし、前の文字とのつながりを意識して漢字、平仮名を書く学習を展開した。下記のようなワークシートを二種作成し、漢字と平仮名とに分けて部分練習を行った。

### 2 指導の流れ(全3時間)

第一時 「竹取物語」から「今は昔」「竹取の翁」などの語を取り出して書く。(毛筆)

第二時 「竹取物語」を、漢字と平仮名とに分けて部分練習をする。(硬筆)

第三時 漢字の行書とそれに調和した平仮名で、「竹取物語」を書く。(硬筆)

### 3 指導にあたって

私は行書が苦手でした。毛筆の文字を学習する前、最初全ての画をつないで書くと思っていました。しかし、そうではなくて画を省略したり、一部の画だけをつないだりする、そのことにより文字の形が変化することにも気付きました。筆順が変わる場合もあることなど、たくさん学びがありました。

まだ、行書には慣れていませんが、これからの書き文字に生かし、普段の生活で使っていきたいと思います。

(前年度生徒作文 S子)

S子の作文では、行書の筆使いについて細かく述べてはいませんが、点画の丸みや終筆の変化、連続にも意識化が図られている。筆使いの違いを意識し、活用しようとする力が育ちつつある。

そこで、毛筆と硬筆を関連させながら、行書の技法を確実に身に付けさせたいと考えた。そうした意味で、書写教科書の硬筆教材「竹取物語」(「書写一年」p19)は、漢字の行書とそれに調和した仮名への発展的な学習に都合良く配置されている。教科書を活用し、毛筆から硬筆への流れを考えて実践してみたい。

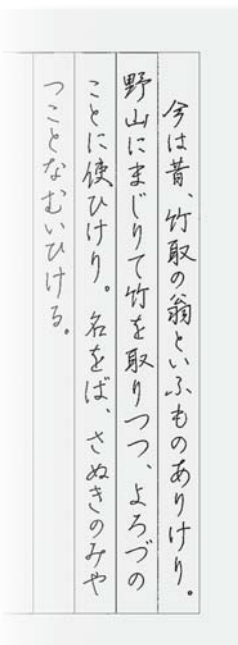


▲ 竹取物語ワークシート(平仮名用)  
※空欄部分に平仮名を書く

#### 【第三時】

本時はこれまでの学習を生かして行書で全文を書いた。漢字と平仮名全体の調和を図るため、書くときのポイントを具体的な文字例を挙げて示した。

- ① 点画の連続 「今」「野」
- ② 右上がりの線の方向 「昔」「竹」
- ③ 偏と旁のある文字の余白 「使」
- ④ 文字の最終画の終筆(次の文字へつなぐ) 「けり」「あり」



▲ 生徒が書いた竹取物語

### 5 実践を終えて

「竹取物語」を教材に、毛筆から硬筆へ行書学習の発展を願ったの試みであった。平素から、毛筆で書いた語句をできるだけ多く示すよう努めているが、同じ字句を毛筆と硬筆両方で書く活動について、生徒は新鮮に受け止めたようだ。行書における漢字と平仮名の調和を図る学習は、次学年で一層深めていきたい。